

国際人嘉納治五郎と揮毫に見る人生観

和田孫博

以前にも書いたことがあるが、私の母校でもあり勤務先でもある灘中学校・高等学校は、灘五郷の酒造メーカーが母体である。昭和の初めに私立中学校を開設するにあたって、その酒造家の親戚で教育者として名を馳せていた嘉納治五郎に顧問を依頼した。嘉納は自分でも理想の学校を創ろうという夢を抱きながら果たせずにいたところに出身地から依頼があったので、二つ返事で承諾し、四半世紀にわたって校長を務めた東京高等師範学校時代の愛弟子の一人を校長に招聘するとともに、何度も現地足を運び、自らが唱道していた「精力善用・自他共栄」という言葉を建学の精神として授けた。創立より八十六年経った今も、この精神を受け継ぎ、その涵養こそが本校の教育目的の根本である。

嘉納治五郎の生家は、摂津国御影村、現在の地名で言えば、神戸市東灘区御影の浜側にあった。現在はその南側に埋立地が出来ているが、当時はすぐ瀬戸内海に面していたと思われる。本校の母体である菊正宗酒造を経営する嘉納本家の分家筋に当たり、江戸時代は酒造と廻船を生業にしていた家だが、治五郎の父親の嘉納次郎作は廻船一本に絞り、幕府廻船方御用達として幕府の海軍とも親交が深かったようだ。軍艦奉行・勝海舟による和田岬の砲台の建造も請け負うなど、勝のパトロンであったという説もある。事実、勝の提案で神戸海軍操練所が置かれたとき、勝はずっと嘉納家に宿泊していた。一八六四年のことであるから、一八六〇年生まれの治五郎も勝のことは記憶に残っていたに違いない。後に勝は、治五郎の姉の嘉納勝子を、長崎海軍伝習所一期生で明治政府で海図作成を受け持った柳樽悦（柳宗悦の父）の三度目の妻として世話している。

明治になり、外国との交易を進めようとする明治新政府に雇われて東京に移った父親について、治五郎は九歳で上京した。欧米との交易を生業とする父親の方針で、烏森の育英義塾で英語とドイツ語を習った。柔道などのスポーツを通じて国際親善に努めた治五郎の生き方には、父、次郎作の生き様が色濃く影響しているのではないかと思われる。

治五郎は語学の勉強とともに虚弱体質を改善するために柔術の稽古にも励んだ。官立英語学校を経て官立開成学校に進学（在学中に東京大学に改称された）。文学部で政治学および理財学の学士取得後、選科に進んで道義学と審美学を学んでいる。大学時代に二つの柔術の流派を統合する形で「柔道」を考案。後輩たちとともに嘉納塾と講道館を起こした。おそらくはじめは書生たちの溜まり場の存在であったのだと思う。やがて嘉納は柔道を科学し「柔の形・固の形」

という技の型を制定した。そして他の芸能と同じように、段級制度を考案した。闇雲に乱取りするだけではなく、技の型を身につけ、ワンステップずつ上達するごとに段級が上がっていく。これが一般庶民に柔道が普及する決め手となったと言われている。

嘉納は早くから柔道を海外に紹介することに努めている。一八七九年にアメリカ大統領グラントが来日の際、柔術を紹介している。講道館柔道を創始する三年前の話である。また、熊本の第五高等学校長時代には、教授として勤めていた小泉八雲にも柔道を紹介したようで、八雲は一八九五年にアメリカの出版社から出した“*Out of the East*”（『東の国から』）の中で柔術論を展開している。嘉納は一八八九年に宮内省御用掛として一年間ヨーロッパに留学するが、その期間にも積極的に柔道を普及した。そのためヨーロッパでは嘉納が日本のスポーツを代表する人物と見られるようになった。一九〇九年にアジア初の国際オリンピック委員に就任するよう要請されたのだが、それは、日本のスポーツが世界的に評価されたというより、欧米だけのオリンピックを世界的なものにしようという企てにおいて、ロシアとの戦争を五分以上に戦いアジアの盟主となった日本から誰を選ぼうかというとき、ヨーロッパで最も知られていた嘉納治五郎に白羽の矢が立ったというのが実情ではなかろうか。事実、その頃日本には、まだいろいろなスポーツを統括する組織などなかった。嘉納が IOC 委員に選ばれ、ストックホルムでの第五回オリンピックに日本選手団を送るよう要請された二年後になって、やっとオリンピック競技大会参加の母体として大日本体育協会が設立され、初代会長には嘉納が就任している。まさに泥縄であったと言えるだろう。

嘉納はその後も欧米やアジアで精力的に柔道の普及に努めている。一九二〇年のアントワープオリンピックに臨席の帰路、ロンドン武道会を訪問し指導と講演を行い、ロサンゼルスにも立ち寄って講演している。それがやがては一九四〇年の東京オリンピック招致に繋がったのであろう。一九三八年、二年後の東京オリンピック開催を確認するカイロでの IOC 委員会に出席した帰り氷川丸船上で肺炎で亡くなるまで、嘉納は日本の柔道を含むすべてのスポーツの国際化に尽力を続けた。彼の死の直後、日本政府はオリンピック開催権を返上し、やがて世界は再びの大戦に、そして日本も孤立と無謀な戦争への道を辿ったのである。

嘉納は若い頃から各地で揮毫している。講道館発行の『嘉納治五郎』によると、額として全国各地に残るものだけでも二百二十六面あるそうだ。本校には開校当時に頂いた「精力善用」「自他共栄」の扁額が、楷書と行草交じりのそれぞれ二枚ずつあり、楷書のは講堂に、行草のは柔道場にそれぞれ掛けてある。「精力善用・自他共栄」は、一九九二年の講道館文化会創立に合わせて、講道館柔道の精神を表すものとして嘉納が立言した言葉である。それ以前には「柔能制

剛」(柔よく剛を制す)や「順道制勝」(道によりて勝ちを制す)など勝負のあやに関する言葉が多いが、ここに至り、「自らの精力を最善活用し、互いに助け合い譲り合うことによって共に栄える」という自己修練と他者との共存共栄とが柔道の目指すところであることを宣言するわけである。そしてこの精神は柔道に限らず、教育を含む世の中のすべての活動において重要な指針となることを嘉納は各地の講演で語っている。本校の開校を手伝うにあたりこの言葉を校是にするよう求めたのもその最中のことであった。

三年ほど前、初代校長のお孫さんの一人から、「嘉納治五郎が校長とその家族のために揮毫した書が紙のまま巻かれて残っているのだが、自分たちにはあまり意味がないので学校に寄贈したい」という申し出があった。そこで有り難く頂戴し、昨年の校舎増改築完成に合わせて表装することとした。ひとつは条幅版で、「盡己^ま成」(己を尽くして成を成す)で、雅号は帰一齋となっているから晩年七十歳以上のものである。この額は新しくなった校長室に自戒を込めて掛けてある。もう一つは全紙五枚組のでっかいもので、巻いているのを開いてみるにも机の上では到底収まらず、柔道場の畳の上に広げてやっと全貌がつかめるといふ大きさであった。五枚の並べ方にも頭を悩ませたが、国語の教員たちの知恵も借りた結果、「志於善 由於正 勉於成 是處世之要」(善に志し^{みち}正により 成に勉む これ処世の要)であるということになった。「よい志を持ち、正しいやり方で、成功に向けて努力する、それが人が生きていく上で一番大切だ」といふような意味の処世術であろう。それぞれ一枚ずつを軸にしても額にしても掛けにくいので、表具屋さんにご相談した結果、屏風にするのが一番見栄えがするだろうということになった。応接室に毛氈を敷き、その上に飾ってあり、来客が目にして感嘆するのを楽しんでいる。雅号は進乎齋となっているから、六十歳代の書である。

最後に、これは本校に遺されているわけではないのだが、教育者としての嘉納の心意気を示すものとして最も有名な言葉を紹介しておきたい。それは「教育事天下莫偉焉一人徳教廣加萬人一世化育遠及百世 教育事天下莫樂焉陶鑄英才兼善天下其身雖亡餘薫永存」である。書き下すと「教育のこと、天下これより偉なるはなし、一人の徳教、広く万人に加わり、一世の化育、遠く百世に及ぶ。教育のこと、天下にこれより楽しきものはなし、英才を陶鑄して兼ねて天下を善くす、その身亡ぶといえども余薫とこしえに存す」となるか。教育の醍醐味をみごとに表している。自らの影響が自分が死んだ後も百世に亘って残るのだと思えば、いささか武者震いを覚えるのは私だけだろうか。教職に身を置く者として常に心に留めておきたいと思っている。

参考図書・文献

・『嘉納治五郎伝』横山健堂著 (一九四一年 講道館)

- ・『嘉納治五郎』 嘉納先生伝記編纂会編 （一九六四年 布井書店）
- ・『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』 嘉納治五郎著 （一九九七年 日本図書センター）
- ・『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』 生誕一五〇周年記念出版委員会 （二〇一一年 筑波大学出版会）
- ・嘉納治五郎記念国際スポーツ研究交流センター パンフレット
- ・「クーベルタンから見た嘉納治五郎」 和田浩一 （二〇〇七年 日本体育学会本部企画シンポジウム発表資料）